

奈良県におけるニューカマーの家族の実態に関する調査

－日系ブラジル人・ペルー人・ボリビア人、フィリピン人の聴き取りから－

生 田 周 二（教育実践総合センター）、田 淵 五十生（社会科教育教室）、
玉 村 公二彦（障害児教育教室）、渋谷 真 樹（教育社会学教室）

Research on the Situations of Newcomers in Prefecture Nara

－ Interview to Brazilian, Peruvian and Bolivian of Japanese descent, and Filipino －

Shuji IKUTA, Isoo TABUCHI, Kunihiko TAMAMURA, Maki SHIBUYA
(Nara University of Education)

要旨：本報告は、奈良県におけるニューカマーの生活・教育課題の把握と問題点の解明のためのインタビュー調査の一端である。「仕事」「日本語能力」「アイデンティティ」「子どもの教育」「偏見と理解」「地域活動や文化活動への参加」「行政（国や役所）への要求」を中心に、問いを投げかけている。今回は、日系ブラジル人（二世）、日系ペルー人（三世）、日系ボリビア人（三世）、日本人と結婚したフィリピン人に対して行ったインタビューである。

キーワード：ニューカマー newcomer、アイデンティティ identity、生活と教育 life and education、

1. はじめに

本研究の調査目的は、ニューカマー（中国からの帰国者とその家族、日系ブラジル人・ペルー人・ボリビア人、フィリピン人など）が、日本に対してどのような期待をもって来日し、現在どのような悩みや課題を抱え、日常的に誰を相談相手とし、また何に生きがいや楽しみを見出しているのか、また子どもの教育をめぐるはどういう問題があるのかを明らかにすることである。調査対象は、日本語教育を必要とする人々で、定住希望あるいは日本で一定期間働くことを希望する人々とその家族（大人調査を中心とする）である。なお、調査対象の紹介等に関わり、「NPOプラザふなはし」の方々、特に仲川順子さんにお世話になった。

本報告では、第1章で日系ブラジル人の家族（担当、玉村）、第2章で日系ペルー人及びボリビア人（担当、生田）、第3章でフィリピン人（担当、渋谷）、それぞれの事例について分析を加えている。なお、「はじめに」と「まとめ」は生田が担当した。

1. 日系二世ブラジル人の適応過程と生活づくり

家族構成は、夫と息子（現在小学校4年生）の3人家族。本人が32歳の時、夫と息子（当時1歳）で、日本へ移住、日本での生活は10年弱を経過している。も

ともと、Mさんの母親は奈良県出身であり、父親と母親は、戦後ブラジルへ移民し、いくつかの職を変遷するが、現在ブラジル・サンパウロで菓屋を営む。Mさんは長女として生育。家では日本語で話すが、通常の学校教育を受け、大学で心理学を専攻し、卒業後、日系の商社へ就職。結婚後、出産のため退職。なお、夫は、日系ではあるが、日本人とポルトガル系のブラジル人の間に生まれている。

当時のブラジルでの生活は、経済的不安定のもとで、インフレが進み、毎日100%のインフレという状況であり、商品の値段が高騰していくという中で、経済的に生活の安定を欠いた状態にあった。Mさんの母親が日本への望郷の念を強く持っていたことも影響して、本人も日本へのあこがれが強く、当時の経済的な不安定さから日本での労働者派遣の波を、「よい機会」ととらえ、夫を説得し、家族で日本に移住した。本人は、「出稼ぎブームに便乗した」と表現している。なお、その際、夫の就業や生活は、奈良の母親の親戚の支えによって段取りはついていった。従って、本人たちの日本への移住に関しては主観的には見通しがあったと考えられていた。日本の生活への適応過程を概括的に捉えれば、ほぼ3年ごとに、時期を区分することが出来る。すなわち、（1）生活基盤の確立、（2）子育てと夫の会社のブラジル人への援助、（3）長男の学校生活とブラジル人子弟へのサポートへの参加というよう

に活動の範囲を広げていっている。その中心軸は、子どもの育児、就園・就学であったようである。

1. 1. 「生きた感じがしなかった」－最初の3年間の生活基盤の確立

ブラジルでの生育過程の中で日本語に親しんでいたこと、日系企業で就業していたことなどで、日本での生活も可能であろうと思っていたが、しかし、日本へ着いたところから日本語でのコミュニケーションの困難に直面した。カタカタの日本語や現代的な表現は理解困難であり、また日本語の読み取りができないことで、より困難が大きく感じられたようである。到着時は、日本語より英語の方がコミュニケーションとしては通じたということであった。

生活の準備は、母方の親戚や夫の就業先の雇用主が保証人となり、段取りをとってくれており、居宅・就業も含めて準備はできていた。奈良県の農村地域に居住し、夫は大阪に就業することになっていた。しかし、「田舎」での生活の問題は複雑で、日常的な地域での交流も、習慣の違いがあり、周囲の人たちとの間に垣根があると感じられ、本人を苦しめていたようである。日常的に相談できる知人・友人がいないなかでの生活は、一つひとつに困難が伴うものであった。特に、子どもの病気の時などの病院の利用（2度ほど入院）、役所での書類の作成、郵便局の利用などでは、日々、神経を使わざるを得ないという状況であった。本人は、この3年間を、「生活していない」「生きた感じがしなかった」と表現している。この経験は、3年間を経て、夫の会社のブラジル人へのサポートに活かされていくことになる。

1. 2. 保育所・幼稚園の経験とブラジル人への援助

子どもが3歳の時から保育所を利用、その後、幼稚園での1年保育を経て、小学校に就学することになるが、子どもの就学前の期間が、第二の時期に当たる。保育園では、初めて受けとめる外国人の子どもということで、なんでも相談ができるように保育士も配慮していたし、また、本人も保護者会も含めて足繁く保育所にいっている。はじめて、何でも肩肘を張らずに話ができるということになったようである。保育所2年経由して、小学校への就学も考慮して、学校に付属する幼稚園に入園する（1年保育）。幼稚園でも、なんでもはなせる状況は継続した。

子どもが保育所・幼稚園へ通園することによって、昼間の生活もゆとりができてくる。その中で、夫の会社に就業してきたブラジルからの出稼ぎの人たちの生活のボランティアを行うようになる。それは、自分が苦労したという経験からのものであるが、T大学のブラジル語学科の教官とのつながりもできて、その後のブラジル人子弟へのサポートの基盤となっていく。

1. 3. 学校教育とブラジル人子弟のサポート

子どもの小学校入学は、学校教育への問題関心を増大させたものであった。もともと、日本のイメージとして「教育熱心な国であり、安全な場所で、質の高い教育を受けられる」というものであった。しかしながら、子どもが小学校に入学してそのイメージとは裏腹の現実と直面する。子どものケンカをめぐる、親同士の複雑な人間関係、子どもをめぐる複雑な出来事に直面するのである。しかも、学校の教師は対症療法的な対応で、建前的な印象しかなかったという。子ども自体としては、会話や日本語の習得上は問題がなく、友だち関係も良好ではあるが、しかし、カタカナでの名前の表記や外見から「外国人」というレッテルをはられて、「いじめ」の対象とされるなどのことがあり、表面には現れないが、ストレスが高いことへの日常的な危惧があるようである。特に、小学校中学年くらいから、アイデンティティの問題とも関連する子どもの自意識の高まりへの考慮もあり、自分らしさのある人間へと成長してほしいという思いは強いものがある。

学校教育への改善要望を契機として、3年前、教育委員会から非常勤としてブラジル人子弟の就学サポートの仕事が紹介された。本人の子どもの場合はサポートはなかったため、一人で苦労した経験を生かして、ブラジル人子弟への援助を行っている。現在は、K中学校に通い、中学校と小学校の通う5名を週2回2時間ずつ対応している。内容は、日常での生活への援助、親への連絡（通訳）などであり、その他、経験を伝える国際理解教育の講師、NPOの活動（Nara Family and Friend）への参加など、積極的な交流活動を行っている。

1. 4. 小括

ブラジル人でありながら日本人であり、日本があこがれの対象であり続けてはいるが、しかし日本の習慣や現実への反発も同時にもっているという。「東洋のがまんづよさ」と「自分らしさを出す」こととの間で、「二世としての苦しみ」があり、日本人とブラジル人との精神的バランスをとらざるを得ないことを強調してくれた。この自らの自己認識は、子どものアイデンティティの形成をどう考えるかという点とも関連するようである。今後は、現在の非常勤でのサポートを続けながら、ボランティアとして正しくブラジルのことを学んでくれるように活動を続けたいと希望を持っている。その中で、日本人にはブラジルの開放的な心を伝え、同時に、日本に来たブラジル人には誠実さを伝えられるようにしていきたいと述べていることが印象的であった。

2. 日系ペルー人・ポリビア人の家族の生活

2. 1. 日系ペルー人・Oさん一家

橿原市に住むOさん一家は、夫Wと妻T、娘E、息子Aの4人家族である。来日目的は、仕事とお金を稼ぐことで、子どもたちは日本語の勉強である。

2. 1. 1. 家族の概要

1991年2月27日に来日したWは、現在35歳、日系3世（祖父鹿兒島、祖母福島出身）、リマ出身である。過去3回日本とペルーを往来している。彼は、16人兄弟の下から3番目という大家族で育っている。母国での職業は、バスの運転手（月収約3万5千円）であった。現在の職業は、日本での最初の職場である、ベアリングを製造する工場に働いている。転職経験は、来日4年後に、3年間トラック運転手として土砂運搬などに従事しただけである。この時の仕事の上での不満は、言葉づかいが荒いことが嫌だったと述べている。

現在の月収は、29万円程度で、10年前景気が良く残業などを合わせて45万ほど稼いだ当時と比べ、格段に少ないと不満をもらしている。勤務時間は、2交替（7.00-16.45、16.45-2.20）、週休2日である。全般的に、職場環境には満足している。その理由には、工場ではブラジル人200人、ペルー人17人ほどが勤務していることも考えられる。彼の日本語能力は、簡単な会話程度で、平仮名とカタカナは読めるが、漢字は困難である。彼にとって気分が落ち着くときは、ペルーから送ってきたビデオや新聞を見るときであると答えている。

続いて1992年5月3日に来日したTは、34歳である。イカ出身で、母国では主婦をしていた。来日後の最初の仕事は洗車場で、8年間働いた。雨の日のみ休みという厳しい労働条件で、休日が無いのがつらく、2000年9月に転職した。現在の職場は、プラスチック工場（弁当箱等）で、そこには二人の子どももパートとして働いている。現在の月収は、25万円程度である。勤務時間は、試行期間の間は9時～17時、それ以降は8時～19時、13時～22時の2交替となっている。彼女の日本語能力は、ほとんど喋れない状態で、相手の言っていることのニュアンスを酌み取ることができるくらいである。日本語の勉強については、したいとは思いますが時間が無いという答えが返ってきた。気分が落ち着くときは、掃除という回答で、家族の者は彼女はきれい好きなんだと言い添えていた。

17歳のEは、弟と同じくリマの近くのカヤオ出身で、1995年3月28日の来日である。橿原市立の小学校を住居の関係で2校経験し、市立中学校を卒業している。卒業後、アルバイトなどをし、現在は母と同じプラスチック工場とメキシコ料理店（週1回）で働いている。彼女の希望は、英語の勉強をしてアメリカへ行きたい

ということで、外国人を多く受け入れている県立高校を2001年2月に受験予定である。合わせてペルーの通信教育も受けている。日本語の勉強は、公民館でまちづくり国際交流センターが委託を受けて実施している日本語教室に通っていた。日本語能力は高いが、漢字や論理的な文章表現において課題を残している。彼女の気分が落ち着くときはという問いに、教会へ行くときと回答している。

弟のAは、16歳になる。姉と同じ学校に通い、現在母と同じプラスチック工場アルバイトとして働いている。ペルーの通信教育を受けるとともに、まちづくり国際交流センターの英語教室に通っている。ペルーに帰ってコンピューターの勉強をするか、日本で自動車整備士の夜間5年間コースに通うか思案中である。その背景として、南米にはブラジル以外に自動車工場が無く十分な経験を積むことができないためである。サッカーに興味がある彼は、気分が落ち着くときの問いに、スポーツ（サッカー）をする時と回答している。

以上の一家が、家族として行動するのは、月1回スペイン語のミサの時に八木のカトリック教会へ行くことと、買物である。父親は日本人とよく間違われる顔立ちをしているが、全員ペルー人でしかないという思いを強く持っている。WとTの二人は、貧しく結婚式を挙げられなかったのが、昨年春に郷里で結婚式を挙げた。

2. 1. 2. 教育、近所づきあい、行政への要求

日本とペルーの学校を比較した場合、制服がある点は共通するが、ペルーでは厳しくないことと、学校にお菓子や時計などを持って行っても良い点が異なるようである。しかし、ペルーでは、先生が権威的で厳しく、質問をしに行っても聞いていないほうが悪いと取り合われないこともある。この点では日本の学校は、先生が優しく、質問にも丁寧に答えてくれ、また運動会・文化祭などはよく準備し楽しいと答えている。しかし、日本の悪い点としては、成績が悪くても落第が無く、勉強できなくても進級する点を挙げている。これでは、生徒の努力が少ないのではないかということである。

近所づきあいについては、日本人ばかりの今のアパート（2DK）に5年間住んでいるが、トラブルはなく、逆に音楽やパーティで音がうるさくても、夜に洗濯しても大丈夫ということである。回りの居住者が、仕事の関係でできないことを分かってくれたり、逆にその音楽のCD貸してと言ってくることもあるという。しかし、6年前に住んでいたアパートでは、パーティの際に警官が苦情を言いに来ることもあったと語っていた。

地域活動への参加は、地域の清掃に年1回参加する程度である。PTAには、言葉の問題でわからないこ

ともあり参加したことはない。

行政への要求については、保険が高い（国民健康保険等で年30万円）ことを第一にあげている。また、子どもたちは、ペルー人が通える学校の設置（スペイン語学校など）とペルー大使館が東京で遠いため、近くに領事館が欲しいと望んでいる。

2. 2. 日系ボリビア人・Nさん一家

吉野郡内に住むNさん一家は、夫M、妻D、長男C、長女K、次男Gの5人家族で、現在の職場の社宅で暮らしている。家族の来日目的は、ボリビアの景気が悪いため、仕事とお金と回答している。

2. 2. 1. 家族の概要

1990年12月26日に来日したMは、36歳の日系3世（祖父秋田、祖母ボリビア出身）である。北部のベニ県出身の6人兄弟として生まれ、税金の仕事（公務員）をして月収約200ドルを得ていた。来日後の最初の仕事は、埼玉県の鉄工所（8～10ヶ月）であるが、その後、神奈川県・飛行機部品工場（3年）、大阪府富田林市・靴下工場（1年）、奈良県天理市長柄・製材所（1年）と転職を重ね、ボリビアに4ヶ月ほど帰国した後、再び来日し、奈良県桜井市・製材所（会社倒産、1年）、吉野郡大淀町・製材所（倒産、3ヶ月）を経て、現在の職場の折り箱店（柿の葉寿司の箱）で3年間働いている。現在の月収は、23万程度と残業手当である。勤務時間は、8時から5時で、原則として週休2日となっている。仕事の上での不満は特にないと答えているが、ただ、残業・ボーナスが少ない点と、保険がない問題を挙げている。彼の日本語能力は、片言の会話程度（ひらがな、カタカナ読める）である。彼の気分が落ち着くときは、ギターを弾く（国際交流会などで歌う）であると答えている。

彼の妻Dは35歳で、ボリビア南部出身で、母国での職業は小学校の先生である。1992年5月12日に来日している。最初の仕事は、大阪の弁当屋（うどん）で、その後、夫と同じ現在の職場でパートとして働いている。月収は13～14万円である。彼女の日本語能力は、夫よりも優れており日常会話程度（ひらがな、カタカナ読める）をこなす。彼女に気分が落ち着くのはどんな時かを聞いたところ、「特にない、とにかく帰りたい。」という回答であった。日本語の勉強は、したいとは思いますが時間がないと答えている。

県立高校普通科1年生のCは16歳で、妹と弟と一緒に1997年6月11日の来日である。中1の1学期の途中から、町立中学校に入り、3ヶ月ほどは日本語で苦労したと答えている。日本語の勉強のために、夜に橿原公民館、地元の夜間中学に通ったり（週2回程度）、学校で週2回4時間スペイン語ができる先生が来てくれて、学校の宿題や分からないときに援助してくれ、非

常に心強かったと語っている。妹と弟もほぼ同じ所で日本語を習得している。学校の授業で困ることは、特に国語（漢字、短歌など）、社会（歴史）を挙げている。逆に好きな教科は、倫理、家庭科である。部活はサッカー部に所属し、できれば日本に残って大学進学か、サッカー選手を目指したいと夢を持っている。彼の気分が落ち着くときは、音楽が好きなので、日本のポップス（ビーズ、グレイ、ルナシーなど）などを聞くときであると答えている。

妹のKは、15歳の中学3年生である。英語に興味があり、近くの県立高校の国際科に進学希望を持っている。しかし、将来的にはボリビアに帰って、大学進学をしたいようである。アルバイトについては、家計を助けるため高校進学後しようと思っている。彼女にとって気分が落ち着くときは、友だちと遊ぶ（メール、音楽、電話など）時である。彼女の好きな教科は、英語、数学、音楽の3教科である。

弟のGは、13歳で中1である。兄と同じくサッカー部に所属している。好きな教科は体育で、気分が落ち着くときは、寝ているときだと答えた。彼にとってスペイン語は、言っていることは分かるが、自分から話そうとすると出てこない言葉になってしまっている。そのため読み書きは苦手である。

以上の家族の休みの日の行動は、ボリビアの友だち（三重県上野・亀山）と時々交流したり遊んだりすることである。それから、Oさん一家と共通するが、月1回スペイン語のミサ（八木のカトリック教会）に出席することである。しかし、子どもが大きくなり、部活等で揃わないことが多いと述べている。

彼らにとってアイデンティティは何なのかを聞くと、父「ボリビア」、母「ボリビア」、兄「?」、姉「ボリビア」、弟「?」という結果である。日本に溶け込んでいると感じた時についての質問では、父はGの小6の運動会で、一緒に走ろうと言われた時、母は国際交流会での経験を挙げている。外国人なんだと感じる点は、全般的にそう思うことが多く、日本人の人間関係のよそよそしい、冷たい感じが気になるという。しかし、食生活では納豆が駄目な以外は、好きなものとして、うどん、焼き飯、カツ丼、寿司、ラーメン、ギョウザなどを挙げている。

2. 2. 2. 教育、近所づきあい、行政への要求

日本の学校は、ボリビア（小5年、中3年、高4年、大5年）と共通しているのは制服がある点である。日本のいい点は、先生の質や教え方、教材や学校の備品、先生と生徒がよくコミュニケーションしている点を挙げている。反対に悪い点は、ボリビアに比べ、先生を尊敬していない（無視、バカにしたり、からかったりする）点、拘束時間が長く休みが少ない（ボリビアは朝8～12時）点である。

父母は、言葉の問題が大きいため、子どもは母国で学ぶほうが良いと述べている。子どもの母語教育については、特にGがそうであるが、子どもたち自身アクセント、言葉を忘れがちになっていること（ナベ、春夏など）を挙げている。家ではスペイン語で会話しているが、兄弟げんかを日本語ですることがあると答えている。以前は母親がスペイン語の指導をしていたが今はほとんどしていない点も問題に感じているようである。ボリビアからの新聞、ビデオ（週1回）、Perfect TV（夜1～2時）を見るようにしているが、肝心のGはほとんど見ないで、日本のテレビ中心の生活となっている。

近所づきあいについては、今の所には近所がほとんどないので、挨拶のみになっている。しかし、社宅が道路のカーブになっている所にあるため事故がよくあり、関係する人たちが問題がないか尋ねたりしてくれると答えている。この地域では中2まで子ども会に所属しているが、1回だけ参加しただけである。授業参観についても母親が中心に行き、父親は1回だけ出席した。PTA活動については、Oさん一家同様、言葉の問題もあり参加したことはない。吉野にはスペイン語の分かる二人、すなわちYさん（パラグアイ生まれの日本人、南大和在住）とKさん（妻ペルー人、JICAのボランティアとして勤務）がいてくれるので、非常に心強く、PTAの連絡事項や注射の案内などを教えてくれたと述べている。

行政への要求は、国民健康保険が高い点と、医療で受診した時に、何を医者が言っているか分からない点を困ったこととしてあげている。そのほか、とにかく今は不景気で暮らすだけで精一杯で、その上に言葉や習慣の問題、冬の寒さがのしかかっているという状態である。つまり、近年の不況の中で、稼いだお金が日常生活や教育への費用に消えていき、帰国もままならない状況を抱えている。

3. 在日外国人女性の生活とアイデンティティ ー日本人と結婚している

フィリピン人女性の場合ー

3. 1. 目的

日本人の配偶者として日本で暮らすフィリピン人女性が、日本の社会でどのような経験をし、いかなるアイデンティティを築き上げているのかを探る。なお、第一回目にあたる本調査では、1人の女性への集中的な聞き取りから、今後の調査の指針を得ることにした。

3. 2. 手法

1人のフィリピン人女性に対して、1時間強のインタビューを日本語で行なった。インタビューは、当該研究プロジェクトであらかじめ用意した質問項目を参

照しつつ、その場の話の展開に対応する、半構造的なものである。対話は、承諾を得て録音した。

3. 3. 対象

対象者は、フィリピン・マニラ出身。30代半ばで奈良市在住。フィリピンで働いていた日本人の夫と知り合って、結婚。直後に帰国した夫を追って来日して11年になる。現在は、夫、小学3年生から4歳までの子ども（男女2人ずつ）、姑、小姑と暮らしている。フィリピンでは販売業に従事していたが、現在は主婦。夫は建築業。

3. 4. 結果

3. 4. 1. 仕事

大家族全員分の家事を一手に引き受けているので、それだけで忙しい。食事など、家族のそれぞれの嗜好に配慮する必要もある。日本料理は、かつて家の料理をすべて担当していた姑から、見よう見真似で覚えた。姑の高齢化もあり、今は自分が料理を担当している。

3. 4. 2. 日本語能力

来日当初は何も話せず、単語程度の夫の英語が頼りだった。今は、会話には困らない。かつて、幼稚園の保護者会の役員決めで、自分は理由も聞かれずに役員の対象外にされたことがあったが、今は逆に、日本語能力を理由に断ろうとしても、まわりの保護者が認めないほどになった。読み書きはできない。簡単な漢字なら予想できる。幼稚園の連絡プリントなどは先生や他の保護者に聞くようにしているが、いつもは聞けずに失敗することもある。書くのは、長男に頼む。一度自宅で紛失物があった際、姑、小姑に、漢字が読めない自分のせいにされて、たいへん悔しい思いをした。1年くらい日本語を勉強したが、その後子育てに忙しく勉強できない。子育てが一段落したら、また習いたい。

3. 4. 3. アイデンティティ

月2回カソリック教会で行なわれるフィリピン人のためのミサに、毎回ではないが参加する。その集まりでは、クリスマスなどのイベントもする。自分は役員をやっている。自分と同じように日本人と結婚しているフィリピン人女性と集まって、タガログ語を話し、フィリピン料理を食べるのがとても楽しい。子どもは、言葉ができないのでこうした集まりには参加しない。家族は、一部を除いてフィリピン料理は好まない。自分は、どこへ行っても、何を見ても、フィリピン人である。フィリピン人としてのプライドがあるので、日本国籍も取れるが、あえて取らない。地域の学校に依頼されてフィリピンについて講演する機会が複数あり、

フィリピン人意識が高まったし、フィリピンについて勉強するようになった。50か60歳になって、子どもが独立したら、夫とフィリピンに帰って住みたい。そのことは夫には言っていないし、夫が来てくれるかもわからないが。子どもは、どこでも好きなところに住んだらいい。

3. 4. 4. 子どもの教育

自分の子は、外見上も言葉能力も他の日本人の子とかわらない、まったくの日本人。特別指導などは要らない。ふつうであってほしい。英語は、将来外国で仕事をする時にも役立つので、フィリピンで教材を買ってきて、自分が毎日1時間くらい教えている。日常会話でも、英語を織り交ぜるようにしている。タガログ語も少し教える。しかし、フィリピンで教育を受けるのは、言語的にも環境的にも不可能。日本での教育で悪い点は、物質的に他人と合わせるのが大変なこと。フィリピンでは、自転車や靴など、古くてもあればいいが、日本ではみんながいいものを持っている。子どもは不平など言わないが、自分が哀れに感じる。

3. 4. 5. 理解と偏見

姑は古い人間で、来日当初は外国人である自分を受け入れられず、家の外にも出させがらなかった。マニラと奈良のちがい云々よりも、家族とのコミュニケーションを取ることに精一杯だった。出産後は孫を自分のペットのようにする姑だったが、年老いて体が弱くなってきて変わった。「自分以外にこんな家に来る嫁はいない」とも思うが、将来は悲観せず、怒りを口にしないようにして、日々を過ごしている。

3. 4. 6. 地域活動や文化活動への参加

地域では、子供同士の行き来がある。フィリピン人の集まりのようすが、地域のテレビに出て、それを見た知り合いに声をかけられることもある。長男の通う小学校で講演を頼まれた際には、長男は「日本語喋れるの?」と言って自分の来校を嫌がった。しかし、講演後は周りの子どもに「〇〇君のお母さん」と声をかけられるようになり、子どもも喜んだ。

3. 5. 考察

3. 5. 1. 国際結婚と女性の地位移動：豊かな日本の貧しい自分

この女性は、日本に来ることによってより豊かな社会に生活することになったが、その社会の中での自分の地位はむしろ下がっていると推測される。複雑で閉じられた人間関係の中で家事に追われる家庭生活や、他の子どもに比較した際の自分の子どもの物質的な貧しさなどが、そのことを示唆している。そのためか、

自分の永住の地として日本を考えるには至っていない。

3. 5. 2. 子どもの教育：英語という文化資本

この女性は、外見や言語能力からみて自分の子どもは「まったく日本人」だと言い、そのことを肯定的に認識している。子どもには、このまま日本で「ふつうに」教育を受けさせようと考えている。女性の母語はタガログ語で、英語も話す。彼女はタガログ語より英語に価値をおき、それを子どもに伝えようとしている。彼女は、我が子が日本語を他の日本人と同じように操るだけでなく、英語も習得して、日本、フィリピンに限らず、国際的に活躍することを期待していると考えられる。

3. 5. 3. アイデンティティの多様性：拡散する家族

この女性は、自分がフィリピン人であることを誇りをもって断言し、将来はフィリピンに住みたいという希望を持っている。一方で、子どもはまったくの日本人であり、フィリピンで教育を受ける可能性はないと言う。海外で仕事をするにしても、フィリピンとは限らない。また、姑、小姑は日本にしか住めず、夫が老後フィリピンに来てくれるかどうかはわからない。このように、現在は日本で同居する一家族だが、将来的な志向は拡散している。このことを、彼女はつきつめて考えたり、憂慮したりはせず、むしろ日々を楽観的に生きることで乗り越えている。この家族のメンバーのアイデンティティは多様であるが、現時点で一人一人に不安感が強いとは予想しにくく、むしろ安定していると考えられる。

4. まとめにかえて

今回の調査は、奈良県におけるニューカマーの実態に関する調査の予備調査的な位置づけもあることと、調査が現在進行形であるため、十分な考察をこの段階で加えることはできない。しかし、調査項目に挙げている、「仕事」「日本語能力」「アイデンティティ」「子どもの教育」「偏見と理解」「地域活動や文化活動への参加」「行政（国や役所）への要求」は、問題を整理するうえで程度を目安になるとと思われる。

備考：奈良県の外国人登録者数（1998年4月1日）

| 総数 | 10,649人 | 100.0% |
|---------|---------|--------|
| 韓国・朝鮮 | 6,345 | 59.6 |
| 中国 | 1,457 | 13.7 |
| ブラジル | 1,136 | 10.7 |
| フィリピン | 337 | 3.2 |
| 米国 | 325 | 3.1 |
| ペルー | 256 | 2.4 |
| タイ | 114 | 1.1 |
| インドネシア | 93 | 0.9 |
| カナダ | 87 | 0.8 |
| 英国 | 81 | 0.8 |
| オーストラリア | 57 | 0.5 |
| ポリビア | 31 | 0.3 |
| その他 | 330 | 3.1 |